

一般意志 2.0

著：東 浩紀

前談

この国の情報技術の経験を活かして、民主主義の理念を新しいものへとアップデートできるし、そうするべきであるという民主主義の可能性をかたっている

第一章 「未来社会についての夢」

「社会契約論」と「情報技術革命」の2つの側面から夢を語っている。
「**社会契約論**」：ジャン・ルック・ルソーによって記された。「一般意志」の理念を解いている
ルソーの思想は、個人の自由や感情の無制約な発露を認めるものとしてよく知られている（個人主義者）が一方で、社会契約論では、全体主義者的側面も伺える
この絶対に両立しない矛盾を解くことに、民主主義を理解する鍵があるのではないか
「**集合知**」：集団が生み出す知性。
情報革新によって、集約可能な意見の数を飛躍的に増やし、集約のメカニズムも急速に洗練させた。かつての集合知とは全くの別物。
集合知へ着目することで、「社会契約論」の矛盾に新しい視角をもたらす

第二章 「『一般意志』の定義」

「**一般意志**」一般的：人民の総意。いわゆる世論。
しかしこれは違う。
ルソー「一般意志はつねに正しく、つねに公共の利益に向かう」
「一般意志は誤ることがない。全体意志は誤ることがある。」
とすれば、世論が全体意志にあたる。全体意志と一般意志はベクトルとスカラーの違いである。
全体意志：個人の意志（スカラー）の総和。
一般意志：それから、「相殺しあうもの」ものをのぞいた上で残る「差異の和」
すなわち、ベクトルの和である

ここで重要なのは、**一般意志が数学的存在であるということ**

第三章 「ルソーの抱く夢」

一般的には、政治はコミュニケーションと切り離せない
一方で、ルソー：政治的な議論の場、コミュニケーションの場そのものが、一般意志の出現のためには障害になる。
つまり、**政治にコミュニケーションは必要ない。**

一般意志は、一定数の人間がいて、その間に社会契約が結ばれ、共同体が生み出されてさえいれば、いかなるコミュニケーションがなくても、自然と数学的に存在してしまうもの。すなわち、モノの秩序に属するものである。

ルソーの夢：全ての市民が一堂に会し、全員がただ自分の意志を表明するだけで、いかなる意見調整もなしに、ただちに一般意志が立ち上がる。そのような特殊な状況を夢見ていた。そのような状況が実現して初めて、人は自由になれる

第四章 「『コミュニケーションなき政治』とは」

「政治」と同義語の「公共性」から考える。
ハンナ・アーレント、ユルゲン・ハーバーマス：公共空間はコミュニケーションによって造られるものである
政治と公共性はコミュニケーションの分厚さによって基礎づけられる
「熟議民主主義」：民主主義で重要なのは、皆の意志が集まることではなく、その意志集約の過程で一人ひとりの意志が変わっていくことである
⇔
シュミット：政治の本質は「友」と「敵」を分割し。敵を存在論的にせん滅すること
これは、経済のグローバル化、政治のリベラル化を先取り、それに抵抗しようとして打ち立てられたものであった
⇔
ルソーの一般意志：**熟議を必要としない、友と敵を分割もしない。今までの政治とはかけはなれた「政治」の可能性**である。

第五章 「『一般意志 2.0』の登場」

「情報技術革命」が起きた現代社会
「一般意志」：データベースのこと
現代社会は、リアルでもネットでも見境なく、膨大な個人情報を蓄積し始めている：「**総記録社会**」
データベースを分析することで、人々の欲望の在処がうかびあがってくる
「総記録社会」では、社会の成員の欲望の履歴を、本人の意識的で能動的な意志表明とは無関係に、そして組織的に、蓄積し、利用可能な状態に変える社会である。そこでは、人々の意志はモノ（データ）に変えられている。
「**一般意志 2.0**」：ルソーの考えに忠実な「一般意志 1.0」を総記録社会に照らし合わせてアップデートして得られた概念
1.0 とは異なり、一般意志 2.0 は具体的なデータベースとして実在している。

二十一世紀の社会はあまりにも複雑で、かつその複雑さが新しい情報技術のおかげであまりにもそのまま可視化されてしまっている。そのため、情報の処理がうまく出来ず、コミュニケーションが日常的に麻痺している状態になる。
すなわち、アーレントやハーバーマスが理想とした公共圏は成立しない。
そういった現在において、表面的には私的利害の調整しか行わないように見える一般意志 2.0 の方が、一人ひとりの選好を変化させる可能性をひらくのではないか。

第六章 「これからの政府のあり方」

「**政府 2.0**」：多様な市民生活や企業活動を支援する、検索サービスやソーシャルメディアのような「プラットフォーム」無意識に導かれる政治

現代社会は、あまりに複雑で、人間の主体的な判断を麻痺させている、逆に情報量を減らすことに価値が生まれている。
そのため、ネット技術の価値は、「情報量」を減らすことで、複雑性の縮減を図っている

私的なコミュニケーションを公的な場につなげ、普遍的な問題意識へと開いていくようなアーキテクチャは（仮想的な情報環境の設計）どうやったらつくれる？
社会思想が高度な逆説としてしか認識できなかった問題を、情報技術な現実に照らしてじつに世俗的で具体的な課題に変えること。

第七章 「政府 2.0 のもつ 2 面性」

私たちはいま、国民の望みが政府に取り上げられないというよりり、国民が本当に何を望んでいるのかが誰にもわからないという状況に直面している。

情報技術を駆使して、市民の意識ではなく、無意識を探る政治

大きな障壁 :20 世紀の政治思想が練り上げてきた「塾議」がなくなってしまうのではないかという懸念

来るべき政府は、一方で市民の無意識を積極的に吸い上げながら、他方で市民との間の意識的コミュニケーションも活性化させる二面性を備えるもの

第八章 「国家と社会の新たな関係」

情報技術に覆われた現代社会は、自分自身を認識するために、国家とデータベースという 2 つの手段をもっている。

筆者は、政治を市場に還元しようと提案しているのではなく、今までの自覚とは異なった自覚の回路が現れ

ているので、それを政治的に利用することを考えている。

無意識をどのよつに統治に活かしていくかの方法を考えるべきである。

第九章 「データベースが熟議を制限する政策審議」

政府は、大衆の欲望も制約条件として受け入れなければならない。現代においては選良と大衆という人間集団の対立があるというよりは、一人の人間が、あるときは選良として、またあるときは、大衆として社会と関わっている。「大衆の欲望」は、その各人の大衆的な部分の集合として形作られている。

「大衆の欲望」すなわち一般意志は、国民全体の発言や行動の履歴から統計的に表れてくるものであり、「大衆」という特定の集団がその担い手になっているわけではない。したがって、一般意志を、説得すべき大衆の意志というよりも、むしろ匿名的で集団的な「モノ」として、物理環境や財政と同じような物質的条件として捉える方がよい。

一般意志を「モノ」として捉え、その制約の上で、政策審議を進める国家。重要なのは、大衆の無意識をいかにして可視化し、専門家の熟議の場に介入させるのかそのインターフェイスの設計である。社会の見通しが悪くなり、大きな公共が壊れている現代において、暴走する熟議を、匿名の大衆のつぶやきで制限することができるのではないか。

第十章 「2 つのテーゼから導く第三のテーゼ」

ルソーの新しい解釈

「一般意志」は、一般に考えられているのとは異なり、討議を介した意識的な合意ではなく、むしろ情念あふれる集合的な無意識を意味している。(第一の柱)

近代の民主主義社会は「大衆の無意識」に従うことが重要である。しかし、一方で、それは全体主義の正当化にも繋がるため、危険な発想であった。

総記録社会の下では、自らの行動や思考の履歴をネットワークの上に残し始めており、無意識を可視化できるようになった(第二の柱)

そして、可視化された無意識は、統治に活かすべきである。

↓

大衆の無意識を徹底的に可視化し、制約条件として受け入れながらも、意識の光を失わない国家。熟議とデータベースが補い合い、ときに衝突することによって、よろよろと運営される国家(第三の柱)

本書の提案：未来の統治は、大衆の無意識を排除するのではなく、かといってその無意識に盲目的に従うのでもなく、情報技術を用いて無意識を可視化したうえで、その制御を志すものとなるべきものである。

第 11 章 「無意識民主主義」

未来の政治への綱領：あらゆる熟議を人民の無意識に曝すべき

無意識民主主義：社会が複雑になりすぎて、熟議への参加コストが跳ね上がっている。その政治参加のコストを劇的に下げることが目的。今までの高級な政治参加とは別に、激安の機能制限版普及政治参加パッケージを別に用意すること

これは、単に大衆の無意識に耳を傾けるだけでなく、市井に眠る潜在的な専門性を発掘するという別の役割も担う。大衆の欲望を可視化することによって、むしろ理性の暴走を抑制することが目的。よって、ポピュリズムとは異なる。

以下、今までの内容の論拠を強めるだけのもの

第 12 章 「民主主義 2.0 の世界」

民主主義 2.0 の社会においては、私的で動物的な行動の集積こそが公的領域を形づくり、公的で人間的な行動(熟議)はもはや密室すなわち私的領域でしか成立しない(今までとの現象の逆転)

第 13 章 「民主主義 2.0 の世界」

リチャード・ローティ：思考の基盤は相対主義。現代社会では、アイロニーが倫理の基盤となるべきだ。いかなる正しさや美しさとも無関係な別種の原理の下で運営されるような、価値中立的で脱理念的なものであるべきだ。

従来は私的領域で処理されていた動物的で身体的な問題こそが公共性の基盤になり、逆にいままでは公的であった精神的な自己完成こそが私的領域に閉じ込められるという逆転 「リベラル・ユートピア」

第 14 章 「ツイッターの話」

第 15 章 「未来世界への想像」

未来の国家：国民の生活様式や思想信条にふれない。個人と国家の関係は、現在よりもかなりドライで、功利主義的なものになる。国家と市場、動物的な生と人間的な生、功利主義とカント主義、リバタリアニズムとコミュニタリアリズムのような二層構造で制御されることになるだろう